



ポレポレ

図書だより

城中図書館へようこそ 7号

2024年3月

(*ポレポレとは、スワヒリ語でゆっくりゆっくりという意味です。)

城山中学校

学校司書 中島順子



3年生の皆さま ご卒業おめでとうございます☆

どんな状況になっても自分の頭で考え、未来を切り開いていってください。

そのためにも本、映画、音楽…さまざまな文化を吸収して、心の体力もつけて、生き抜いていかれることを願っています ☆ ゆっくりゆっくりあきらめないで!



朝日新聞 天声人語 (令和六年二月二十日朝刊から)

『ドラえもん』のび太は、何をやってもいいことがない。テストは0点だし、犬にかまれるし、買ったばかりの漫画をジャイアンに取り上げられる▼でもあんなに何度もつまずきながら、決して人生をあきらめないのが、のび太のいいところだ。年に数回は「今の自分より少しはましになりたい」と一念発起し、宿題をやるうと机に向かってママを驚かす。考えてみれば、芯は強いかもしれない▼作者の藤子・F・不二雄さんが雑誌で、くるくる回る床屋の看板を人に例えていた。上へ上へと夢を追いつつながら、じつは同じ場所にいる。「しまいには、その『上昇の夢』さえ忘れてしまう。そうじゃなくて、挫折しても明るく夢を見続ける『自分を見捨てない人』に共感してほしい。」きつとのび太のことだろう▼卒業シーズンが近づく。多くの高校生は、3月上旬に別れの時を迎える。希望の道へ進む人、涙をのんだ人。さまざまだろう。この一歩で残りの人生も決まると、若いうちは思うかもしれない。でもそんなことはない。大事なのは「自分を見捨てない」ことだ▼ドラえもんから眼鏡型の道具「ファンタグラス」を借りたのび太は、童話さながらに、動植物と心を通わせられるようになる。大事に育てたタンポポから、綿毛が最後にひとつ、春風に吹かれて飛んでゆく▼どこへ行くつもり?のび太の問いに綿毛が答える。「わかんないけど…、だけどきつと、どこかきれいな花をさかせるよ」。旅立つ若者たちに幸あれ。



2024・2・20

今年度の貸し出しは、三月八日(金)まで。返却は、十五日(金)厳守!

日本近代文学特集 (明治・大正・昭和の文学作品)



*「日本近代文学の作品は、中学生のうちには是非読んでもらいたい作品ばかりです。高校に入ったら夏目漱石、森鷗外、中島敦などの名作がたくさん教科書に出てきます。予習もかねて是非一度手に取ってみてください。」(国語科)

司書のイチオシ!



【住友先生からのおススメ本】

『女生徒』 太宰治(著)

(明治42年~昭和23年39歳没)

「朝、眼をさますときの気持ちは、面白い」「朝は意地悪。」14歳の少女が、朝、起床してから、夜就寝するまでの1日を綴った作品で、太宰30歳の時の作品です。

冒頭に書いたように独特の文体で、少女のみずみずしい感性が描かれています。少女の独白体で書かれていることもあり、読み手に「どうしてこんな気持ちになるの?」と思わせるのは、さすが「女性語りの名手」と言われるだけあります。

2年生の教科書にも載っている『走れメロス』もそうですが、独白の文体が、とても魅力的な作品です。

「きゅうりの青さから、夏が来る。五月のきゅうりの青味には、胸がカラッポになるような、うずくような、くすぐったいような悲しさが在る」私の好きな一節です。ぜひ読んでみてください。

(ほかに『人間失格・斜陽・走れメロス』などがある。)



女生徒

『蜜柑』 芥川龍之介(著)

(明治25年~昭和2年35歳没)

横須賀線の電車に座る“私”は、雪曇りのどんよりした空のなか、疲労と倦怠からぐったりして発車を待つ。そこへ十三、四くらいの不潔で愚鈍な小娘が入ってきて私の不快感はピークに。トンネルにさしかかり娘が、悪戦苦闘して窓を開ける。そこで娘は、突然踏切で見送る弟3人に、窓から身を出して、暖かな日の色に染まっている蜜柑(みかん)を5、6個を投げつけて弟たちに与える。弟たちの一生懸命の歓声。奉公先に向かうであろう姉を見送る弟たちに報いるように蜜柑を放る真っ赤なほっぺの娘。“私”は得たいの知れない朗らかな心もちが湧き上がる。短い作品の中に暗闇から輝く赤にうつる見事な展開。

芥川龍之介作品の中でも名作の一つと言われるゆえんだろう!(ほかに『蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ』などがある。)

図書ボランティアの皆様♥♥♥一斉作業のブッカーかけで新着図書を長くキレイに利用できるように!昼開館サポートにて読書タイムの確保!朝の読み聞かせで本の面白さを伝える!お忙しいなか今年度もボランティア活動に参加して下さりありがとうございました♥♥♥